

『今が、歴史を創る時』 個々人がつむじ風を起こそう

第5回 歳を取るという事、母性という事

(毎月掲載)

永田 隆一

家族に会うのも4年8カ月ぶりでした。皆変わらず元気で安心したのですが、一番うれしかったのが、短い今回の帰国で会えないかもしれないと思っていた、ばあちゃんに会えたこと。明治生まれのうちのばあちゃんはたくましいのです。83歳で大腿骨を骨折してから、血糖値900を越える糖尿病、脳卒中による半身マヒなどを乗り越え、今年97歳。

僕のこと分かるかどうか不安でしたが、僕を見た途端、「ああ、完(かん)ちゃん」と顔の筋肉をほぐして明るい笑顔を見せてくれました。「まだまだしっかりしてるなあ」などと思っていたところ、30分位してから「あんたは誰かね」と僕に聞いてきました。「僕は完(かん)よ」とすると、ばあちゃん、「ああ、この家にはかんちゃんがいっぱいおるねえ」みんな大笑いで。

ただ、ばあちゃんのぼけを皆があかるく笑い飛ばせるまで、ばあちゃんが、他人の助けなしでは生きていけない自分の境遇を受け入れて穏やかになるまで、10年以上の時間がかかりました。

さあ、そんなばあちゃんが、僕にこういいました。「あんたまだ私の息子を見てないねえ？」ばあちゃんの息子たち、つまり僕のおじさんおばさんは、みなよく知っています。

叔母に聞いたところ、その僕が知らない、ばあちゃんの息子とは、じつは会った時から、ばあちゃんがひざに抱えていた、ちっちゃなお人形だったのです。名前は起久三(きくぞう)というらしく、新たなおじさんの存在と古いネーミングセンスに僕はまた笑いました。

そして、おばが、ずっと語り出します。「ばあちゃんの、子供は私とあんたの父ちゃん含めて7人よね。でもね、あんたの父ちゃんが生まれる前に、実はもうひとりあんたのおじさんに当たる人が生まれたんよ。死産やったんやけどね。戦後すぐでね、ばあちゃんは自分はろくにご飯も食べずに、ほとんど子供にあげよったほ。やけえね、栄養がたりんかったんよね。生まれてきた子供は、すぐ亡くなりなされたぞ」。「おなかの子供に気をくばれんかったばあちゃんはすごく後悔したんやけど、自分の胸にしまって、前と同じように子育てをするしかなかったんよね。あんたもそのなくなったおじさんの話聞いたことないやろ」。

「うん、ない。じゃあもしかして」。

「そのあんたのおじさんの名前が、起久三なんよ」。もう笑うことはできませんでした。

でも、ばあちゃんはちょっとセンチになった僕をよそに、起久三さん



噂のきくぞうさんです

に布団をかけたり、ご飯をあげたりと、かいがいしく世話をしていました。ほかの7人の子育てのために、しまい込んだ起久三さんの記憶を今、その胸から取り出して、できなかった子育てを、自分が他人に世話をされる側になった今している。「ははは、おいしいかね。よかよか。ははは」

僕を育てた親父の大きな背中、小さなスプーンを握るこのばあちゃんの、このしわしわの手から生まれたんだと、あたりまえのことを本当に知ったのは、この時が初めてだったんでしょ。

初代はキューピー人形だったらしいのですが、目をずっと開けたままだったので「この子は眠らんが、大丈夫じゃろか…」と、心配するので、人形の体の角度によって目を開閉する今の人形になったそうです。やっぱりわらっちゃう。

(今回は、山口県下関市から、ペルーへ渡って8年、従弟の森川 完さんの話であります)